

「愛媛で教員になるモチベーションを高める教育内容・方法の充実」 鴛原進教授の講義を受けて
教職大学院教授 小田哲志

1 本講義を受講して

本講義では、鴛原教授より、「教職教養課題特講」の実践についてご教授いただいた。

愛媛県の教員になりたいというモチベーションを維持し高めるためには、県内各地（島しょ部、山間部、都市部）の各学校種での教育の実際を知ることが一番であるとの考えをもとに、「教職教養課題特講」の充実を図られている。そして、愛媛県の教員採用試験を突破し地域で活躍する人材育成を目指している。

なぜ、山間部・島しょ部の小規模校？

①「教育の原点」

大学のゼミにもいた全人教育としての実践がある。
素直な子どもと温かい地域が教師を迎えてくれる。

②愛媛県の小・中学校総数の大部分は小規模校

教育学部における教員養成は小規模校の教師養成ともいえる。

③小規模校の教師は教師数人分の役割を果たす

小規模校の教師とふれあうことで、教職全般のことが必然的に習得できる。

教職大学院において、「小規模校実習」を担当しているが、本講義を受講するまで、学部生がどのような思いを持って進学してきているのかということについて理解をしていなかったが、今回の講義は「小規模校実習」の在り方に大いに示唆を与えるものであった。

「なぜ、山間部・島しょ部の小規模？」の上のシートにより、三つの意義が示されているが、まず、その

思いを共有した上で、いかに大学院において、実践的に発展させていくか今後の課題である。

2 教職大学院「小規模校実習」での目的と実際

愛媛県の小中学校においては、へき地指定校の割合は15%前後となっている。そのため、若年教員の多くが小規模校での勤務を経験することになる。また、学校管理職においても、経験の浅い時期に小規模校に着任することが多い。へき地・小規模校には、都市部の学校とは違い、小規模校ならではの特有の技術や方法が必要となる。そこで、小規模校における特色ある学校経営管理、または、教育指導の特性と要点を理解し、実践に生かすことが不可欠である。

そこで、教職大学院においては、「小規模校実習」を選択教科として実施しており、本年度は、久万高原町、松山市内の島しょ部の小規模へき地学校で、7名の院生が2週間、現地に滞在しての実習を行った。また、平成28・29年度の2年間で本実習を履修した院生14名の内、13名が学部卒業生であった。

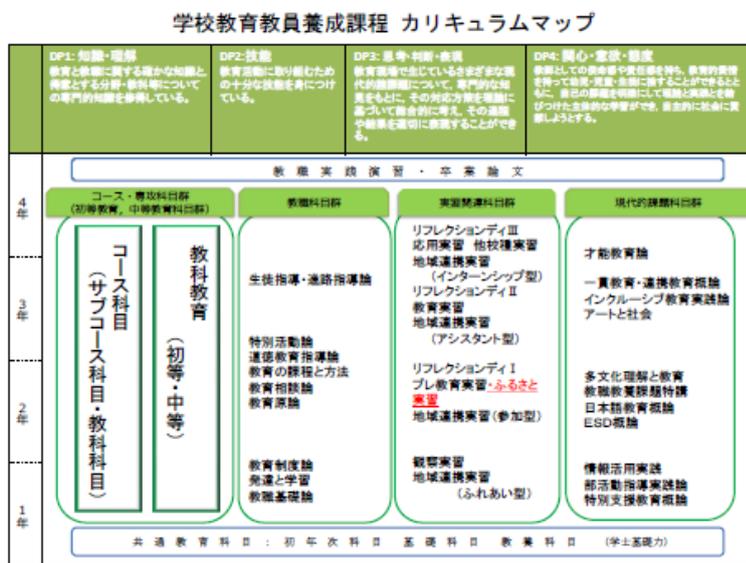
本実習では次のような学部卒業生の到達目標を掲げている。

【学部卒業生の到達目標】

- ①愛媛県内における小規模校の特徴を、正しく理解し、分かりやすく表現することができる。
- ②教職大学院で習得した知識等を活用し、小規模校における授業等の実践計画を策定し実行することができる。
- ③小規模校における学習指導等の実践を通して、小規模校における効果的な実践の在り方について理解を深め、報告書にまとめることができる。

3 教員養成課程 カリキュラムマップの説明を受けて

下の図は、本講義で示されたカリキュラムマップである。これを見ると、教職大学院で実施されているような「小規模校実習」に当たるものはない。学部時代には、応用実習等で特に希望があるもののみ、へき地での研修が実施されていると思われる、その他の学生にとっては駕原教授らがやっている「教職教養課題特講」における研修は極めて効果が高いものと言える。



さらにいえば、本研修が教員へのモチベーションの向上に資するのであれば、必修教科として行わせることも必要ではないかと考える。講義によると事後の質問紙調査に対する細かい分析がなされていたが、各項目共に高い数値を示していた。非常に手間のかかるものではあるが、学部におけるふるさと実習・応用実習の充実に合わせて、「教職教養課題特講」の発展、新規で「小規模校で学ぶ実習」の創設等、今後も確実な予算の確保、事業の拡充が望まれる。

4 本研修を踏まえた教職大学院「小規模校実習」に見える課題

これらを踏まえて教職大学院では、学部時代にこのような研修を受けている学生を預かる（とはいえ、学部からの入学は半数程度であるが）へき地教育のよさ・有用性を再確認させると共に、実践的指導力の向上のために、さらなる改善を行わなければならないと感じている。

下は、現職教員に対する「小規模校実習」の到達目標である。

【現職教員の到達目標】

- ①実習先の小規模校と勤務校との違いや特徴を、組織・カリキュラム・指導法等の観点を立てた上で正しく理解し、分かりやすく表現することができる。
- ②教職大学院で習得した知識等を活用し、小規模校における教育指導全般に関し、小規模校における課題解決のための具体的計画を策定し実行することができる。
- ③小規模校における学習指導・学級経営・生徒指導等の実践を通して、小規模校における効果的な実践の在り方について報告書にまとめ、提示することができる。

【リーダー教員の到達目標】

- ①実習先の小規模校と勤務校との違いや特徴を、政策・法令・組織・カリキュラム・指導法等の観点を立てた上で正しく理解し、分かりやすく表現することができる。
- ②教職大学院で習得した知識等を活用し、小規模校の教育課題を解決するための具体的経営計画を策定し、当該校教職員に提示し検討することができる。
- ③小規模校での実習を通して、小規模校ならではの経営課題を発見し、小規模校の強みを生かした教育経営に在り方について報告書にまとめ、提示することができる。

特に、教職大学院が期待されている使命を果たすために、次のような課題があるものと思われ

る。

前述の通り、「小規模校実習」で現職教員の履修は1名のみに残った。上に示したように到達目標を掲げているものの、現職教員にとっては「小規模校実習」に対する学びがイメージできにくく期待が低いことによるものと思われる。管理職になって初めて小規模校に赴任する教員も少なからずおり、学生卒業生のへき地学校における実践的指導力の育成と同様に、現職教員に対しても重要な事項である。本研修で学んだことを活かして、特に現職教員の達成目標を小規模校実習においてどう実現していくか、実践上の課題を解決していきたいと考えている。